

インターネットを利用した『ジーベンケース』論

恒吉, 法海
九州大学大学院言語文化研究院 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/10059>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, 2000-11-15. 九州大学出版会
バージョン :
権利関係 :



インターネットを利用した『ジーベンケース』論

恒吉法海

『ジーベンケース』と題して論ずるが、原題は『花の絵、果実の絵、茨の絵、あるいは帝国市場町クーシュナッペルにおける貧民弁護士F・S・t・ジーベンケースの結婚生活と死と婚礼』（1796—97年）という長いもので、物語の他に様々な付録が付いている。ジャン・パウルでは著者と読者が本来の主人公と言われるように、物語に筋はあるものの、そればかりが眼目ではなく、脱線等の著者の自在な語り口を楽しむことも肝要となる。まず物語の粗筋を述べると、主人公ジーベンケースは小市民のレネッテと結婚する。ジーベンケースは友人ライブゲーバーと瓜二つで、友情の証に名前を交換したのであった。しかしこの交換が徒となって後見人に遺産の継承を拒否される。そこで窮乏生活を余儀なくされるが、妻レネッテの掃除の音や蠟燭の芯切り等こまごましたことで執筆活動が上手くいかず、質屋通いも重なり夫婦仲は悪くなる一方である。射的会で王様になるという僥倖はあるものの苦しい生活が続く。そこへライブゲーバーが仮死という手段を思い付き、死んだ振りをして主人公は妻と別れ、ライブゲーバーになりすまして彼に約束されていた職に就く。最後にはバイロイトで知り合っていた知的女性のナターリエと結婚するに至る。仮死の際には寡婦年金の手配をするという周到さである。物語の中心にあるのはこの当時の庶民の生活描写と仮死という茶番劇（例えば公証人が遺言の内容に驚いて窓から飛び降りたり、大家の床屋が仮死者の髪を取りに来て、棺での髑髏の仕掛けにたまげる場面）であるが、この他にこの小説で見逃せないのは、著者のアイロニカルな語り口、雑学、比喩、人間のエゴイズムや神の不在を嘆く付録部分での論考、主人公の一風変わった处世哲学やライブゲーバーのエロスの見えかくれする諧謔等であって、こうした箇所は概して難解であり、ゆっくり読むことが必要である。（引用はハンザー版、第3版、1971年 Bd.2）

本稿では主に次の項目に従って筆を進める。1）茶番的仮死の場面の紹介、2）冠婚葬祭を中心にした物語の進行、3）二重自我の分析、4）エゴイズムについて

1）茶番的仮死の場面の紹介

公証人は、遺産を渡さない後見人に死後化けて出ろぞという遺言の内容に驚いて窓から飛び出るのであるが、単なるこの場面もジャン・パウルの筆にかかると原型と模型という二重自我の問題、執筆者の生の問題にいきつくテーマと関わることになる。この問題は影絵切りのモチーフ、ライブゲーバーの得意とする影絵切りとも照応するであろう。変奏してジャン・パウルでは頻出する金貨の肖像画への言及とも照応することになる。

「そのとき公証人は飛び上がって、息苦しいと述べて、より新鮮な空気を吸う為に窓際

に近寄った、そして下の方に窓台からわずかな射程の所にタンニン樹皮の丘が築かれているのを見ると、背後から後押しするような恐怖のために彼は胸壁から外に押し出された。このような第一歩の後、彼を遺言の証人の一人が後から掴まえる間もなく、彼は第二の長い歩みをもろに空中に行って、そしてその自動秤の自らの指針として窓台を越えて、それで彼は低い浮き彫り台に ― つまりタンニン樹皮に ― 容易にぶつかることが出来た。落下する芸術家として彼が到着の後仕上げた結構なものは、自らの顔を彫刻刀として、彫塑の型として、コピー機として利用し、そうして自分の像を凹み細工として生気なく丘の中に象ることに他ならなかった。この丘に彼の指は勤勉な彫刻刀として置かれ、自分自身をコピーし、そしてインク壺の横に置いていて持ってきた公証人の印章でもって彼は偶然この偶発事に連署した。このように簡単に公証人は ― 宮中伯に似て ― 第二の公証人を創り出す (506f.)」。

当時は髑髏は手近に見られたとみえ、ライブゲーバーは見張りの代わりに髑髏を探してきて、仮死者の周りを窺う者どもびっくりさせる仕掛けを作る。忍び込む大家の床屋はかつて鳥撃ちの射的では主人公ジーベンケースと同盟を結び、一緒に射的の王となった仲である。

「夕方ハインリヒは理髪師とレネッテの許に下りて行き、その際ドアに鍵を差したままにしておいた、上に住んでいる借家人達は最近の幽霊の噂を耳にして以来余りに臆病になっていて、自分達のドアから頭を突き出すことすらできなかったからである。故人の髪を巻くことを許されなかったことをまだ怒っていた理髪師は、自分が上にこっそり忍んで行き、毛髪の森林を伐採したら、ちょっとしたものだという考えに至った。髪や薪の販売は ― 殊に髪は輪や文字へと編まれるので ― その生え代わりよりも活発であって、それで死者に棺や自分の髪を残すべきではない、髪はすでに古代人が冥府の神々の祭壇の為に切り取っていた。 ― そこでメルビッツァーは爪先だって部屋に入り、早速鋏の鉗子状器官を広げて構えていた。ジーベンケースは寝室にいて容易に仮面の眼窩から盗み見て鋏と大家の組合から間近に迫っている不幸とポープの巻き毛盗みとを察知した。彼は、この苦境にあっては自分の頭よりはベッドの下で禿頭が頼りになると見てとった。臆病げに背後のドアを退却の為に開け放ったままにしていた大家はようやく人間の植木鉢の植物まで近寄ってきて、この収穫の月に草刈り人夫として務め、ひげ剃り屋と髪結いとを一体化させ、ひげ剃り屋の敵を討とうとした。ジーベンケースは隠した指で出来るだけ上手に髑髏を巻き上げて外へ出そうとした。しかしこれは余りにゆっくりとした動きであって ― 逆にメルビッツァーは余りに急いでいたので、 ― それで一瞬彼はその間 ― 殊に邪悪な霊は人間にしばしば息を吹きかけるので ― 大家に対し仮面の口の割れ目から長い夜風を吹きつけることでしのがざるを得なかった。メルビッツァーは自分にまことの息詰まる空気、殺人的なサムーン[砂嵐]を寄越すゆゆしい送風器の正体が分からずにいた、そして彼の暖かい構成要素は氷の円錐に結晶し始めた。しかし残念ながら故人は息を撃ち尽くして、空気銃にゆっくりと新たに装填せざるを得なかった。この静止によって巻き毛の盗

人は再び気を取り直し、やる気が出て、それでナイトキャップの総飾りの先端を握って、この薄い浮遊する蜘蛛の糸、帽子を髪の毛の野から剥がそうと新たな準備をした。しかしつかんでいる最中に彼はベッドの下で何かが動き始めたような音を聞き取った — 彼はじっとして、悠然と — 鼠かもしれなかったので — この物音が更にどんな正体を現すことになるか見守っていた。しかし待機しているとき突然彼は何か丸いものが彼の太股を伝って、回りながら上の方に押し上がってくるのを感じた。彼は早速空の手を — もう一方の手は鉄を広げていたので — 下の方に伸ばした、するとこの手は、絶えずこの手を持ち上げようとする、つるつるした上昇する球になすすべもなくノギスのように当てられることになった。メルビツァーは見る見るうちに骨のように堅くなってこちこちになった — しかし置かれた手が新たに持ち上げられ、忍び寄る柄頭を一目見ると、青ざめて凝固して床にへたりこむ前に、恐怖のすさまじいキックを受けて、それで彼は容易に部屋から飛び去った、不安の四十ポンド砲の火薬によって直射されたかのような案配であった — 彼は下の部屋の中へ入って来た、手には広げられた挟みを持って、口と目とを広げて、顔には漂白場を設けていた、これに比すれば彼の下着や髪粉は宮中喪であった。にもかかわらず彼はこの新たな状況の中で大いに分別を見せて — 彼の名誉の為に喜んで報告するが、 — この出来事については一言も漏らさなかった、一つには幽霊の話は九日経っていないうちに話すと大いなる災いがあるからであり、もう一つにはそもそも髪の毛の刈り込み、私掠については如何なる日でも話すことは出来なかったからである。 — (S.519f.)」

小説を読む楽しみの一つに当時の状況が分かるようになって面白いという側面があるが、この小説ではその興味も満喫させられる。仮死の場面では、医者 の 出現、遺言のための公証人の出現、死後の棺桶屋の手配、湯灌婆、この理髪師やひげ剃り屋の出現、墓碑銘の文等である。この小説で仮死が可能なのは、葬儀が、今でもヨーロッパではそうだと思うが、土葬であるからである。火葬であれば、死後石ころだけが出現し、露見することになる。

2) 冠婚葬祭を中心にした物語の進行

次のカレンダーは物語で利用されている1785年と1786年のカレンダーである。現実の日(原物)と創作の日(模型)とがやはり分かちがたく結び付いている。言及されている日、あるいは推測される日は祭日が多い。(九州大学六本松地区のサーバーより入手したカレンダーである)。

1785												1786																								
Jan						Feb						Mar						Jan						Feb						Mar						
S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S		
						1							1	2	3	4	5					1	2	3	4				1	2	3	4				
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31				
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
23	24	25	26	27	28	29	27	28						27	28	29	30	31								26	27	28	29	30	31					
30	31																																			
Apr						May						Jun						Apr						May						Jun						
S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S		
						1	1	2	3	4	5	6	7									1	2	3	4	5	6									
3	4	5	6	7	8	9	8	9	10	11	12	13	14	5	6	7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
10	11	12	13	14	15	16	15	16	17	18	19	20	21	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31			
17	18	19	20	21	22	23	22	23	24	25	26	27	28	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	18	19	20	21	22	23	24	25	26	
24	25	26	27	28	29	30	29	30	31					26	27	28	29	30									25	26	27	28	29	30	31			
Jul						Aug						Sep						Jul						Aug						Sep						
S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S		
						1	1	2	3	4	5	6	7									1	2	3	4	5	6									
3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	13	4	5	6	7	8	9	10							3	4	5	6	7	8	9			
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	20	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	27	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	17	18	19	20	21	22	23	24	
24	25	26	27	28	29	30	28	29	30	31				25	26	27	28	29	30								24	25	26	27	28	29	30	31		
Oct						Nov						Dec						Oct						Nov						Dec						
S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S	S	M	Tu	W	Th	F	S		
						1							1	2	3	4	5					1	2	3	4				1	2	3	4				
2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12	4	5	6	7	8	9	10							3	4	5	6	7	8	9			
9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31		
16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	16	17	18	19	20	21	22	23	
23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30				25	26	27	28	29	30	31							24	25	26	27	28	29	30	31		
30	31																																			

上述したようにこの小説を歴史的・文化・人類学的視点から興味深いものになっているのは、当時の冠婚葬祭、祭日の具体的記述である。物語の冒頭はレネッテの輿入れから始まる。レネッテの冠や結婚式の際の食事等細かく描かれている。仮死の場面は当時の葬儀の段取りが窺われて、先に述べたように歴史的資料としても貴重なものであろう。最後はまた主人公の結婚で終わるが、カレンダーを見て気付くことは、この物語の期間が仮死を中心にしてちょうど二年で完結していることである。1785年の8月主人公はレネッテと結婚し、1786年8月仮死、1787年彼の「命日の月」にナターリエは旅して、墓地で主人公と遭い、結婚することになる。日付の確認出来るものを具体的に見ていくと、冒頭の結婚式の日時は確定できないものの、8月20日付けの後見人の訴訟受付から推定するに、その前後の火曜日となると、8月16日か23日ということになる。1785年の祭日は開基祭、ミカエルの日の市（9月29日）でケーキ作りの言及、聖マルティン祭（11月11日）は鷺鳥の苦心の入手、競売日（11月28日）で若干の潤い、聖アンドレアスの日は射的の日（11月30日）で、主人公は最後に的を倒して王様となる。12月4日は射的で王になったことの祝いの日曜日だが、造花の誤解で夫婦の不和、12月8日は聖母マリアの無垢受胎の日、コーヒーを飲みに出掛け、一時的和解、12月31日大晦日は喪服の質入れと不和、1786年元旦には生命保険に入る決心をし、2月11日はレネッテの誕生日、この日は地震の予告日でもあり、時計の質入れによる喪服の請け出しをし、和解、4月12日、二度目の訴訟敗訴、4月13日（聖木曜日）ライブゲーバーへの手紙、復活祭を経て、五月上旬（日付は不明）バイロイトへの旅立ち、5月7日はナターリエとの初めての出会い、5月8日ライブゲーバーとの再会、仮死の取り決めをする、この日は名前の命名の日[聖名祝日]でシュターニスラウの日である、8月17日はフリードリヒ大王の死去の日であるが、遅れて伝わっていることが分かる、いよいよ8月24日仮死決行（こ

それは墓碑銘より分かること S.523)、10月20日レネッテ再婚(これも墓碑銘より分かること S.567)、レネッテ死亡(1787年7月22日)、1787年8月主人公とナターリエとの結婚(仮死の命日の月にナターリエの旅と記述あり S.571)、その他付録の部分で春分の日(ジャン・パウル誕生日)の言及がある。また数字の上で興味深いことはレネッテが1767年生まれであり、従って結婚のとき19歳を越えていないことが明らかにされており(S.37)、ジーベンケースは29歳(S.55)であって、ライブゲーバーは「ジーベンケースより年下だった(S.53)と設定されていることである。レネッテはうっかりすると中年の主婦というイメージがあるが、随分若いわけである。

以上概括したように物語は結婚ではじまり、結婚で終わり、その間に仮死を挟んでいる。日常は「市民階級の祭事に彼女は愛着を有しており、クリスマスにシュトレンが — 復活祭にチーズケーキが — 聖マルティンの日に鷺鳥が欠けるくらいなら賛美歌や聖福音集が欠けていいと思う(207)」という具合に、日常の生の場面が具体的に描かれているのであるが、その他にジャン・パウルではお馴染みであるが、死を想えの *Memento mori* のモチーフも通奏低音のように描かれている。主人公は髑髏を手にしたような感慨に耽る。

「彼は骨になって野外に眠っている頭を転がし、両手で — レネッテが身を汚すことのないよういくら頼んでも — 多くの住处を持つ精神のこの最後のカプセルを持ち上げて、そしてこの破壊された離宮の空しい窓穴を見て言った。『真夜中に人は教会の中の説教壇に立って、自我のこの皮を剥がれた仮面を、砂時計や聖書の代わりに説教台の上に置いて、他のまだ皮に覆われている頭の持ち主達の前でそのことについて説教すべきだ。人々がそうしたいというのであれば、私の頭の皮を私の死後剥いで、教会に、鯨の頭をそうするように、綱で洗礼盤の天使のようにぶら下げても構わない、愚かな魂の者達が一度は上の方を見、一度は下の方を見るようにさせるためにだ、私どもは天と墓地の間に吊され、漂っているのだから。私どもの頭には、参事官殿、まだはしばみ虫[象虫]がまだ巣くっています。しかしこの頭部から虫はすでに変態して飛び去っています、というのはこの頭部には穴があって、その中身は粉末にされていますから』(S.267)」。

描写にも次のような無常感をそそるものがある。「歌の節はいつも次のように終わった。『諸行は無常、逝きて帰らず』。彼は痛みに、それが被囊類であるかのように、その暗い窒息させる皮で包まれた(S.320)」。「彼が旅館に入ると、一人のハープ弾きの女が幼いフルート奏者の伴奏の下、酒場にいる客の前で歌を歌っていた、その歌のリフレインは『逝きて帰らず、諸行は無常』であった(S.568)」。

著者自身無常感を述べる文章を時に書いている。「かくて我々人間は、我々の最期のベッドの上で我々の花卉が閉じるとき、より高い存在のために花時計の役を果たすことが出来る — あるいは、我々の人生の砂時計がきれいにこぼれ落ちて、それが別世界で裏返されるとき、砂時計の役を果たすことが出来る、あるいはこの下界で我々の吊鐘が鳴って、我々の像が箱からかの第二世界の中へ歩み出すとき、からくり時計の役を果たすことができる — より高い存在は、七十年の人間の年月が過ぎ去ったこのようなすべての場合

にこう言うことが出来る。『すでにまた一時間経過しました、神様、何と時は移ろうことでしょう』(S.389)』。

このように茶番の仮死による手法であれ、真面目な感懐であれ、手を変え品を変えジャン・パウルは死に接近しようとしているのであるが、ここで生ずるのは、人間は仮死以上の死を知り得ない、描写による死も遂に真の死に及ばない、死ぬのはいつも他人という感懐である。本人は生きているかぎり仮死以上の死に至ることはない。

またジャン・パウルでは筋立てが自然に細部まで計算されることがあって、先の主人公が髑髏を手にとって眺める場面は、それによって手が汚れることを嫌うレネッテの清潔好きのモチーフと結び付くことになる。先の場面では主人公との和解を薦められたレネッテは握手を拒否するが、それは彼が手を洗っていないからという作者の説明が付けられることになり(S.269 参照)、後の場面で彼女がライブゲーバーから遠ざかるとき、その理由は単に犬がなめた手を洗っていない人だからという種明かしとなる (S.488)。ここではついでに彼女のファンテジー宮殿と空想との取り違えも種明かしされることになる。



図は <http://gutenberg.aol.de/jeanpaul/siebenks> より

一般のイメージはそっくりな二人の出現であろう。事実『ジーベンケース』挿し絵と思われる絵は図のごとく、顔も洋服も同一の二人を描いている。ジャン・パウルの説明では「いや、彼らの対極の名前の単なる相違が（というのはジーベンケースは許すことをより好み、ライブゲーバーは罰することをより好んだ、前者はよりホラティウスのな諷刺であり、後者はより非文学的かつ文学的な厳しさをもったアリストファネス的な流行歌であったからである）、お互いに惹かれ合うように決定づけたのではなかった。しかし女性の友人同士が同じ服を着るのを喜ぶように、彼らの魂は完全に人生のポーランド服[子供服]と部屋着を着ていた。つまり私が言っているのは、同一の縫い取りと色とボタン穴と飾り紐と型をした二つの肉体のことである。二人は同じ目の閃光と、同じ土色の顔を持ち、背丈も瘦

せ方も何もかも一緒だった。(S.40)」。大体魂の嗜好は同じであるが、肉体はそっくり、ただライブゲーバーはびっこを引く、そして二人は友情の証に名前を交換したと語られている。しかし注意しなければならないが、肉体は同じでも普段着る洋服は同じでないということである。そのことが明らかになるのはジーベンケースの仮死の後ライブゲーバーとして復活するために洋服の交換が行われる場面（第22章）である。従って挿し絵の情景はこの小説の二重自我の説明としては間違っているのである。しかしうっかりするとそう勘違いしたくなるようにジャン・パウルは説明している。

ジーベンケースの性向をより過激にしたのが、ライブゲーバーであると思われるが、そのことが確認されるのが、ライブゲーバーの言説である。彼は独身であるが、その彼の方がジーベンケースよりもエロスの見える言説を行う。一方結婚生活を行っているジーベンケースはほとんどエロスについて言及しない。例えばライブゲーバーは第4章で自分をアダムと見立てて、その精子で何人もの悪人の先祖ともなるし、また善人の先祖ともなるのだと述べている。その口調は一々具体的である。「けれども神様に誓って、私は、その中にはあらゆる民族の種子が入っている種入れ袋をぶらさげて遍歴し、全人類の目録と出版金庫を、小さな全世界を、『世界図絵』を自分の前に持って、歩き回っているが、...(S.121)」。

「けれども、未来を完全に見通している私は、自分の詞華集から分かるのだが、私が本当に自分のブルーメンバッハが名づけた形成衝動を用いて、あの悪名高き初夜権に、最初に作られた人間の眼差しを何度か送らねばならないとしたら、誰かが例えばやるように十人の愚か者を作るのではなく、十の数兆倍の人間と — さらにそれに加えて数兆人が、私の中に住んでいるすべての生粋のベーメン人 — パリ人 — ウィーン人 — ライプツィヒ人 — バイロイト人 — ホーフ人 — ダブリン人 — クーシュナッペル人（とその妻と娘たちも含めて）に関して — 私を通じて生を受けることになるだろうが、彼らの中には、常に道理をわきまえてもおらず、理性も持たない人間が百万人に対して五百人以上はいることになるだろう。(S.123)」。「私は、アリストテレスやプラトン、シェイクスピア、ニュートン、ルソー、ゲーテ、カント、ライプニッツといった、総じてその祖先自身よりもはるかに頭脳の優れた者たちの先祖、祖先、ベツレヘム、形成的自然になるのだ(S.126)」。

その他ライブゲーバーは木食虫のノックの音を死の訪れと取る迷信について言及しながら、実はそれは愛する雌のためのノックであると述べているが(S.491)、次の浴槽での仕事は想像力を刺激するエロスに満ちている。「突然彼は飛び上がって言った。『もし叶うなら、一度ブリュッケナウへ行きたい。そこの風呂の大桶の上は私の講座、ミューズの座となろう。商人の妻、参事官夫人、田舎貴族夫人あるいはその娘が閉ざされた浴槽、聖遺物入れの小箱の中に甲殻類として入っていて、服の場合と同様に首だけ出していて、この首を私は啓発することになる — どのような説教を私はパドゥアのアントニウスとして優しい鯉やセイレーンに向かって魅力的に説いたらいいだろうか、これはむしろ濠をもった要塞であるけれども。私は彼女達の隣のように水中でも消えない燃えるような魅力の木製のケ

ースの上に座って、講義することだろう。 — しかしこれは、私自身がこのような入れ物、容器の中に入り込み、その湯の中を水圧オルガンのように動き、河の神として私の少しばかりの職務の才能を浴槽の学校で試してみるときに私がなし得る益と比べたら何というものだろうか。私はマギステルの帽子を被った頭だけが鞘から刀の柄頭のように出ているので、確かに湯の中で教える身振りをするが、しかし美しい鋳型どもや、水中に繁茂している稲穂、水生植物、哲学的な水利工事やこうした類を浴槽から追い出し、今まさしく私のクエーカー教徒の樽や、ディオゲネスの樽を取り囲んでいるのが見えるすべての婦人達を、極上の教えを撒きながら逃がしてしまうことに比べたら。 — 誓って。私はブリュッケナウに急ごう、湯治客よりは私講師となる為に』(S.462)」。

こうしたエロスの言説の一方ジャン・パウルではよく議論される自己対鏡と言おうか、鏡を前にしての自己の二重化をライブゲーバーは行っており (S.531)、原型と模型について自己の肉体を前に省察を行っているのであるが、ここでは更に指による世間の二重化、簡易喜劇法を紹介しておきたい。「『下の路地では勿論もっと上手くいって、はるかに多い一行を得られる。私が人差し指で眼球を押さえると、どんな人であれ、すぐにその双子が得られ、どんな亭主もそのつけ同様に倍になる。自分の同僚を探して会議に出掛ける議長も、そのオランウータンを私が与えないような議長はいない、両者は頭を付き合わせて私の前を歩いて行く。 — 一人の天才が模倣者を欲するならば、私は筆記指、人差し指を取り出して、生きた複写が即座に生み出される。 — どの学者の協力者の側でも一人の協力者が協力して働き、補佐人には補佐人が補佐される、一人息子達にはコピーが準備される。というのは御覧のように、私は彫塑の自然力、花糸、彫刻刀を、つまり指を有しているからである。 — 私がソロの踊り手を四本の足で跳ねさせないことはめったになく、この踊り手はペアとして空中に吊されなければならない。しかし私が唯一人の男とその肢体をこのようにグループ化して何を得ているか、君は評価すべきだ。私が葬列や別な行列までも二重自我に倍加して、どの連隊も、すべてを先んじて行かうか真似する一連隊全体の翼兵分だけ補強するときの獲得された民衆の数を数えて見るがいい。というのは、先に言ったように、私はいなごのように産卵筒を有するからで、つまり指のことだ。 — こういうわけだから、フィルミアン、私は君達すべてよりも多くの人間を享受しているという安心を、つまりちょうどその倍だけを、それも自らの猿としてどの動作においても何かまことに滑稽なことで容易に楽しませてくれる人々ばかりを享受しているという安心を少なくとも得ておくれ』(S.532)」。

こうした指先のだぶりの視線による笑いは『ヘスペルス』のヴィクトルが現実をそのまま見て、心の中で喜劇に見立てる手法と相似ており、ルカーチの類ならば現実宥和の諧謔と見なしうる誰も現実には傷付かない笑いであろう。しかしこれはまた他者との付き合いという点で洗練されており、実は政治的感覚までそなえた笑いとまで言えるかもしれない。読者は安んじて笑える。ライブゲーバーが政治的感覚を備えていることは、ファドゥーツの領主（伯爵）と懇意であることから明らかである。確かに彼は次のように述べて、自分の孤高性を強調している。ジーベンケースが仮死後なぜライ

プゲーバーと再会出来ないのかという問に彼はこう答えている。『第一に』 — と彼は悠然と答えた — 『伯爵や寡婦年金、君の未亡人といった人々には、私が二つの版で存在すること、これは第一版、原典本でも、一人乗りでも、独り寝でいてもほとんど気に入って貰えないような世界ではいまましい不幸であろうから、このことに気付かれてはならないからである。第二に私はこの世の阿呆船では、あれこれのがさつ者の役を選んで、誰にも私と気付かれない限り、恥ずかしく思わずにやっで行こうと決めているのだ。 — もっと重要な理由を挙げようか。 — 自分が誰にも知られず、引き離され、束縛もなく、造化の戯れとして、機械仕掛けの悪魔として、全く未知の隕石として人々と地上に月から落っこちることは気分がいいのだ。フィルミアンよ、変えようがない。ひょっとしたら数年後一、二通の手紙を君に送るかもしれない、ガラテヤ人達は故人宛にまるで郵便局に投函するように火葬用の薪の上に手紙を置いたそうだから。 — しかし今のところは実際変えようがない』(S.533)。

このように彼は自分の孤高な処世を語っているが、しかしファドゥーツ伯爵は結局のところ真面目なジーベンケースよりは、この傍若無人なところのあるライブゲーバーの方が気に入っているのである。『私はそれを喜んで許そう、理由と思われるものを察知しているのだから』と彼[伯爵]は付け加えた。しかし彼の許しは実は全く本当ではなかった。というのはすべての偉い人同様に彼にとってはすべての強い感情は、愛の感情ですら、うんざりするもので、最もそうであったのは悲しみの感情であったからである、そして力強い友情の握手は半ば足蹴に等しかった。それで彼の前では痛みは単に微笑んで、邪悪さは単に哄笑して、せいぜい笑い飛ばされて通り過ぎるべきであった、ちょうど最も冷淡な世の紳士がその最も温かい体温を横隔膜のあたりに有する肉体上の人間に似ているように。従って伯爵にとっては以前のライブゲーバーが — この暴風雨的でいて同時に晴朗な濃い青色の空である彼の方が — そう称している者よりも好ましかった。 — しかし非難を静かに読んでいる我々よりもどんなに異なっているジーベンケースは非難を耳にしたことだろう。(S.560)」。この伯爵の言葉は、言っていることとと思っていることは違うとジャン・パウルの注解している点でも政治家の言説の有様を窺わせて興味深い。

一方ジーベンケースの方は、夫婦生活を送っているが、エロスについてほとんど言及しない。貧民弁護士という職業であるが、ほとんど弁護士活動は行わず、もっぱら作者ジャン・パウルの初期諷刺集の『悪魔の文書からの抜粋』の執筆を行っている。彼の諷刺も大まかにはライブゲーバーのそれと大差はない。「すでに諷刺的な性格のために、ジーベンケースには、身分の低い人々にはあまりにも丁寧で、打ち解けた態度を示すのに、身分の高い人間にはあまりにも生意気な態度を取るという欠点があった(S.88)」。しかし身分の高い人々は生意気な態度を許すということを先に見た我々は、これもなかなか正しい処世であると察しが付こう。主人公は貧乏生活が続けるが、弁護士活動に本気にならないのは、主人公が執筆者の作者の投影に他ならないからであろう。また作者はこの『ジーベンケース』執筆当時独身である。従って本書ではエロスについての態度が二つに別れて自己を防御し

ていると見るのが自然であろう。顕在的隠蔽と隠蔽的顕在である。一方はライブゲーバーとしてエロスを顕在化して独身の自己のエロスを隠蔽しており、他方はジーベンケースとして夫婦生活を送ると称しながら、エロスを隠蔽している。しかし主人公ジーベンケースの隠蔽されたエロスが明らかになるのは最後のナターリエとの墓地での出会いの場面である。彼は薔薇の棘で血を流す。エロスの象徴的言及である。「彼はかつて彼女から渡された薔薇の小枝の固くなった棘の輪を見つめ、それと知らずに無感覚に棘を指に押しあてた。...しかし彼女の友は棘と血で一杯の手で彼女を抑えて言った。『私を見捨てるのですか、ナターリエ』(S.575)」。隠したるより顕るるはなし。これが独身者ジャン・パウルのエロスである。先の『ヘスペルス』(1795年)では王妃に誘惑された主人公ヴィクトルは王妃と自分との間にシャツの飾りピンがあつて血を流すことになり、また女主人公クロティルデについては血斑の撫子、竜田撫子の比喩が用いられていた。この程度のものが独身者ジャン・パウルのエロスの描写である。勿論俗な笑話的性のエピソード、ローザ的な誘惑は別にしているが。

従ってこの二重自我の話は後年ドイツロマン派で見られる二重自我の話のように、そしてすでにジャン・パウルの『巨人』でもそうであるが、自我の破壊で終わるものではない。ライブゲーバーは主人公のエロスを防御するという役目を守っている。ジーベンケースとナターリエはライブゲーバーの吹く音色に守られて逢い引きを楽しんでいる。「突然ハインリヒの音色が、さながら雷雨を告げる鐘楽のようにこちらに響いてきて、嵐の前のように二人の麻痺した者の魂を捉えた、そしてメロディーの熱い泉の中で陶然となった心は散った。(S.414f.)」。

4) エゴイズムについて

二重自我の出現はオットー・ランクの古典的『分身論』(1911)によれば、「自己の避けがたい消滅にもっぱら脅威を感じている原始的な自己愛」に由来するものであるという。ジャン・パウルは原物に思い入れが深いが故にその模型にこだわる可言えよう。『ジーベンケース』で顕著なことは、この自己愛に隣接する人間のエゴイズムを見据え、慨嘆したり、反省したりする文章が多く散見するということである。作者は晩年には著述家の虚栄心に専ら矛先を向けてくるが(例えば『フィーベルの生涯』)、この時分にはエゴの裸形に驚いている気配がある。

これは付録の部分での作者ではなく、ヴィクトルの反省であるが、「いやはや。利己愛というのは、即ち私や他人の利己愛は、本来何を欲しているか気付くのに私が三十歳にならないと分からなかったというのは一つの罪です — 利己愛は自分の周りに自己の反復以外の何ものも求めていない、これが要求しているのはどの地上の王子も私のように牧師の息子であること — 誰もが高貴な人間達を失ってまた得ること — 誰もが侍医であつて、その前にはゲッティンゲンで学問に専念していること — この者はゼバスティアン

と言って、現在の鉱山局長が彼の生涯を四十五の犬の郵便日で書き記していること――要するに地球上に十億のヴィクトルがたった一人のヴィクトルの代わりに存在することなのです。私は各人にお願いします、自分自身の魂に探偵を送って調べさせて欲しいものです、この魂は他人が胃にベーコン薫蒸室を有するからといって、あるいは他人が極細ヌードルのように細いからといって、あるいは他人が州書記であるからといって、あるいは他人が子牛の肉にバターをかけるからといって、あるいはこの者がアウクスブルクのカトリックの夜警人であって左手が白、右手が赤と緑の上着を着ているからといって千倍も憎んでいやしいかと。人間ははなはだ自分の自我に没入しているので、誰もが他人の好みの料理の予定献立表をあくびしながら聞いているのに、自分のその新聞報道では他人を喜ばせていると思ってしまう(S.430)。

「その理由はこうである。どの感情も、どの情熱も狂っていて、それ自身の世界を要求したり、築いたりしているのである。人間はもう十二時だ、あるいはやっと十二時だと言って怒ったりする。――何と馬鹿げたことだろう。情熱は自分自身の世界のみならず、自分自身の自我、自分自身の時間をも求める。――私は各人に一度内心の自分自身の情熱に限無く語らせ、その言葉に耳を傾け、その情熱が一体何を欲しているか尋ねてみるようお願いしたい。人は情熱のこれまで口ごもっていた願望のものすごさに驚くことだろう。怒りは人間に一つの首を、愛は一つの心を、悲しみは二本の涙腺を、誇りは二つの屈した膝を願っているのである(S.200)」。

「私はこう言うだろう。泣いたり――荒れ狂ったり――がみがみ言ったり――恨んだり――黙ったり――吐いたり等々すると。かくもすさまじく利己心はごく繊細な道德感情を偽造し、買収して同一の法律問題に対する二重の判決を下させる。私はある人物や決意の価値について判断が揺れる場合、それが印刷機から濡れたまま出てきており、長編小説とか伝記の中に描かれているものとして思い浮かべることによって即座に解決している――その後でも私が良いという場合、それは確かに良いものである。(S.475)」。

「しかし君達善良な者達よ、君達の半分の給料の許で、君達の飢える地球の冷たい空の孤児院で、君達の暗い迷路のさまよう割れ目の許で、そこではアリアドネの糸そのものが罟や網となるのであるが、この平和な財政状態が何の役に立とうか。――どれほど貧民弁護士は錫の担保のシリングと、次に彼が書くことになる二つの書評の収入でしのげるだろうか。――しかし我々は皆叙事詩の中のアダムのようなもので、我々の最初の夜を最後の審判の日と見なし、太陽の日没を世界の没落と見なす。我々は皆我々の友人の死を悼むが、あたかも向こうにはより良き未来はないかのようであり、あたかもこちらではより良き未来はないかのようにより自らの死を悼む。――というのは我々の情熱は皆生来の神の否認者であり、不信仰者であるからである(S.183)」。

「このように我々は皆、我々が苦しめた人々を埋葬するとき言う。しかし同じ葬式の晩に我々は投げ槍を、別のまだ暖かい胸に深く放つのである。我々は強い志をもった何という弱虫か。その死滅しつつある、我々自身によって付けられた傷を我々が後悔の涙とより

良い決心とで償おうとする故人の姿が今日再び新たに造られ、若々しく元気に我々の中央に歩み出てきて、我々の許に留まるならば、我々はただ最初の何週間だけは再び見いだしたより好ましい人物を大目にみながら我々の胸に抱くであろうが、しかし後には以前のように昔の鋭利な拷問具の中に押し込むであろう。我々がこうしたことを我々の愛する故人に対してもするであろうことは — 生きている人々に対する苛酷さは別としても、 — 我々が夢の中で、亡き故人がまた姿を現したとき、故人に対して我々が後悔していることすべてを繰り返すことから見てとれる。 — 私がこのことを述べるのは、亡き人をもっと立派に愛するという後悔や感情の慰めを、悲嘆にくれている人から奪うためではなく、ただこうした後悔やこうした感情を得意に思う気持ちを弱めるためである。(S.568)」。

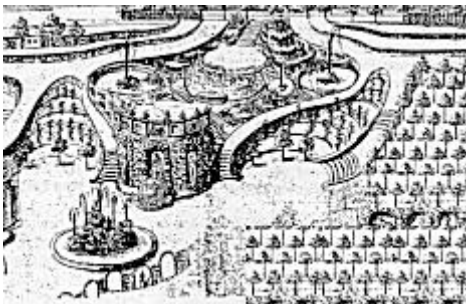
以下 Web で入手した関連の写真等を示す。

現在のファンテジー宮殿



<http://home.t-online.de/home/Stephan.Hoehn>

往時のファンテジー宮殿



同

現在のエレミタージェ宮殿 ナターリエが少女を救うために飛び込んだ水盤か。



<http://www.mediaglobe.de/bayreuth/Bay-er6.htm>

射的の際に言及される 230 頁の「それは赤い血の地に銀の鷲であった」とされるポーランドの紋章



<http://www.edonagasaki.ne.jp/japoland/00taguchi/wadai/godlo.htm>

同様に射的の際鷲が有するとされる王冠と王笏、帝国林檎



<http://www.bildung-rp.de/einrichtungen/LMZ>

若きジャン・パウルのエロスの象徴 竜田撫子 Federnelke



<http://www.people.or.jp/%7efourseasons/nadesiko.htm>

ジーベンケース最後の章の Trauermantel (キベリタテハ)



<http://www.kannet.ne.jp/guide/kiberi.htm>